



Title	中国沿海部出土アラビア語墓碑にみえる聖典章句 : 海域アジア初期イスラム碑文の比較研究
Author(s)	向, 正樹
Citation	アラブ・イスラム研究. 2018, 16, p. 93-116
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105988
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国沿海部出土アラビア語墓碑にみえる聖典章句
— 海域アジア初期イスラム碑文の比較研究 —

向 正樹

**Holy Sentences within Arabic Inscriptions
Found in the Coastal Region of China
— Comparative Research on Early Maritime
AsianIslamic Inscriptions —**

Masaki MUKAI

抜 刷

「アラブ・イスラム研究」第16号 2018年

Journal of Arabic and Islamic Studies

مجلة الدراسات العربية والإسلامية

Vol. 16, 2018

中国沿海部出土アラビア語墓碑にみえる聖典章句 —— 海域アジア初期イスラム碑文の比較研究 ——

向 正 樹*

Holy Sentences within Arabic Inscriptions Found in the Coastal Region of China —— Comparative Research on Early Maritime Asian Islamic Inscriptions ——

Arabic inscriptions carved on Islamic tombstones excavated from the coastal areas of China and Southeast Asia are valuable evidence of the interregional ties between diasporic Muslim communities from the 13th to 15th centuries. This article mainly analyzes three typical Islamic formulas found on Arabic tombstones in China and compares them with those of other regions, relying on data from the Thesaurus of Islamic inscriptions (Thesaurus d'épigraphie islamique—now available online). The first formula, “the death of the exile is martyrdom,” and a few similar sentences can be found in *Kitāb al-Sunan* by Ibn Mājah of Qazwīn. It is worth noting that the influence of this formula, attributed to the apostle, was confined to Iran, especially around Qazwīn. The second formula is from the *Qur'ān* III: 182/185, as well as other chapters. The earliest examples appear in Iran, but later occur in Central Eurasia. The third formula is also from the *Qur'ān* LV: 25–26. The oldest examples are found in Vietnam and East Java; however, there is some debate about where they were originally carved. The next oldest inscriptions appear in Kāzerun, Iran, which was important to the Indian Ocean trade in the mid-14th century. The formula later appears throughout the 15th century in Pasai, North Sumatra, probably due to the Muslim diaspora to this area.

1. はじめに

中国出土のイスラム碑文には、モスクの修築を記念する漢語で書かれた石碑のほか、13世紀から14世紀半ばにかけては、アラビア語で書かれたものが多数残されている。アラビア語碑文には、かつてモスクなど宗教建築の一部であった石材も含まれるが、圧倒的多数は墓石である。墓石には大きく分けて二種類あり、ひとつは、地上に寝かせるタイプの蒲鉾状の墓蓋（または石罫）、もうひとつは、地面に垂直に立てる多くが尖頭アーチ石板の墓表である。墓蓋・墓表ともに文字が刻まれる例が数多くある。本稿でおもに取り上げるるアラビア語墓碑は墓表タイプのもので、両面または片面に5～10数行の『クルアーン』章句をはじめとする宗教的な定型句、賛辞、故人の名前、没年などが記される。アラビア語を主体としつつも一部漢語を併用するものやペルシャ語の詩が挿入されるもの、故人の肩書・称号や名前などにトルコ語・モンゴル語的な語彙を含むものなどを含む。

* 同志社大学准教授

こうした中国出土イスラム碑文の研究は、19世紀末から20世紀初頭に中国各地を訪れたヨーロッパ人探検家や碑銘学者・東洋学者らによって先鞭がつけられた (Himly 1887; Huat 1905; Broomhall 1910; d'Ollone 1911; Arnaiz et Berchem 1911 ; etc)。その後、中国大陸では、1966～76年の文化大革命でかなりの墓石が破壊されたり、失われたりしたとされるが、泉州では呉文良らの努力により、イスラム碑文を含む貴重な宗教石刻が難を逃れ、その図録が公刊されている (呉1957)。70年代以降になると、中国政府の改革開放路線とあいまって展開した学術的な海上交通史ブームのなか、中国沿海部の外来宗教史跡が海のシルクロード交流の証左として注目され、泉州・杭州・揚州・広州などのイスラム碑文についても個別研究が進んだ。とくに1980年代に中国の陳達生とフランスのルトヴィック・カルス (Ludvik Kalus) の共著による福建イスラム碑文 (泉州・福州・厦門)の研究は重要な成果といえる (陳1984 ; Chen et Kalus 1991)。90年代になると、それらの研究成果の整理・総括がなされた (陳1992, 1993; Chen 1991, 1999; 中田1980, 1988他)。近年では90年代よりはやや下火になったものの、200年に呉幼雄が『泉州宗教石刻』の増訂版を発表した (呉2005)。さらに2010年代以降、英国のA・H・モートン (A. H. Morton) とジョージ・レーン (George Lane) が杭州のイスラム碑文の訳注研究を連続して発表し、2015年にその成果を集大成した図録を出版した (蘭2012; 莫頓2011; 莫爾頓2015)。

比較対象地域として重要な東南アジアより出土のアラビア語碑文の研究も、20世紀初頭までにフランスやオランダの碑銘学者たちによって先鞭がつけられた。近年はマジャパイトの都トロウラン遺跡に近いマカム・トロロヨ出土墓碑など、現地研究者による調査研究も進展している。ジャワ島ではマリク・イブラヒム廟、マジャパイト博物館にレラン (Leran) 出土アラビア語墓碑を見ることができる (Moquette 1912, 1921 ; Ravaisse 1925; Guillot et Kalus 2004; Kalus & Guillot 2008)。とくに2000年代以降、フランスの碑銘学者ルトヴィック・カルス (Ludvik Kalus) が考古学者クロード・ギョー (Claude Guillot) と共同で東南アジア各地で現地調査を行い、出土イスラム碑文の訳を再検討し、精力的にこの分野を刷新してきた (Kalus & Guillot 2003a, 2003b, 2004, 2006, 2008, 2009 etc.)。またルトヴィック・カルスは世界各地のアラビア語碑文のデータベースであるイスラム碑文シソーラスの構築に関わっている。イスラム碑文シソーラス (Thesaurus d'épigraphie islamique) はジュネーヴのMax van Berchem 財団によってオンラインで無料提供されており、メールアドレスを登録することによって利用可能である¹⁾。これにより本稿で参照するデータの幅を広

1) 財団 HP (<https://maxvanberchem.org/en/thesaurus-d-epigraphie-islamique>) の解説によれば、データは随時更新されており、2017年1月第14次更新で、新たにコーカサス、ロシアとウクライナの碑文データが加わり、第13次更新時点でマグレブ諸国、アラビア半島、旧ソヴィエト圏以外の中央アジア、エジプト、インド周辺、サハラ以南のアフリカ、イラク、西ヨーロッパ、東南アジア、近東、トルコ、イラン、アフガニスタンをカバーしていた碑文データベースに組み込まれた。現在約41,000件の碑文データファイルが登録されており(2,5000の地名を含む)、14,000の写真が閲覧可能である。(Thesaurus d'épigraphie islamique, 2018年3月14日閲覧, <http://www.epigraphie-islamique.org/epi/login.html>)

げることができた。

本稿では、これらの先行研究と筆者自身の調査から得られたデータを利用して、中国沿海部出土のイスラム碑文のうちアラビア語の墓碑に刻まれた『クルアーン』章句に着目し、関連する地域のアラビア語墓碑のデータと突き合わせる。以下の各章では、まず、筆者が新たに解説しなおした中国・揚州出土のアラビア語碑2件のテキストについて分析を加える。次にそのアラビア語テキストに現れる二つの定型句と揚州には見られないが泉州など他の出土墓碑には現れるもうひとつの定型句に着目し、それらの定型句がいつ、どこで、どのように現れ、どのように広がっていったのかを分析する。

2. 揚州出土のアラビア語墓碑

本節では、中国アラビア語墓碑にみえる宗教的な定型句を分析するに先立ち、それらの定型句の多くをテキストに含む碑文について考察を加えてみたい。それは揚州（江蘇省）の普哈丁墓園内に保管されている、テキストに没年とニスバ²⁾の記載がある2通のアラビア語碑文である。普哈丁墓園内には、元代のアラビア語墓碑4通（8面）と墓蓋4件（うちアラビア語銘文を有するもの1件）ほか明清の墓廟や墓蓋がある。元代のアラビア語墓碑は、1920年代半ば頃、揚州の南門の擋軍樓の土台部分から出土し、1957年までは揚州の仙鶴寺に保管され、1957年時点では大殿左前にたつ短い石壁に嵌めこまれていた。その後、普哈丁墓園にそれら4通を保護しつつ両面を見ることのできるガラスケースを備えた専用の碑亭が立った³⁾。

これらの碑文については拓影（朱1956）と中国語訳（努爾1983）が発表されているが、2016年発表の拙稿であらたにアラビックの転写と英訳を示した（Mukai 2016: 237-246）。本稿では、そこに見られる3種類のイスラム聖典の章句について、中国沿海部の他の港市や東南アジアやその他の地域出土のアラビア語墓碑にそれらが見られるのかどうかを確かめたい。

まず、テキスト以外の特徴を押さえておきたい。碑文1のA面が漢語のみで書かれた墓表となっているほかは、すべてアラビア語で書かれている。墓石の全体的な形状や輪郭の装飾については、碑文1はきわめて簡素であり、碑文2は緻密である。

2) ニスバ (nisba) は ‘noun of relation’ といわれ中世アラビア語における人名の一要素であり、個人と(a) 部族・支族・王朝・家族・名祖（を共有する集団）などのようなグループとの関係、または(b) 国・地域・都市・村・街区・街路などとの関係を表したり、(c) あだ名や代々受け継がれる専門的な称号 (professional designation) を表すとされる (EI, vol.8: 54)。

3) 陳達生（努爾）は朱江に基づき、これら4通のアラビア語墓碑は、中華民国13・14年（1924-5）に南門外の擋軍樓の土台から出土したとする（朱1957: 47；努爾1983: 105）。ところが、耿鑑庭によると、これら4通のアラビア語碑文は1927年に揚州南門外の擋軍樓を撤去している際に、その土台部分から出土した。1929年には、同じく南門外の水門と擋軍樓の城壁土台部分を整理している際に、墓石本体にあたる複数の墓蓋（原文では石鱗）が一か所に折り重なって出土した。おそらくは建築資材として再利用されたもので、かつての墓所の位置は知りえないが、おそらくはその近辺であろうという。その後、これらの墓石群は揚州の仙鶴寺というモスクに保管されたが、中華人民共和国成立後に普哈丁墓園で一括管理されることとなった（耿1978: 87）。

とくに碑文2の B 面のような唐草・花卉文様は、杭州の鳳凰寺に保管されているアラビア語墓碑にも酷似するものが多数みられる (莫爾頓2015: passim)。碑文2の A 面の幾何学文様は中国や東南アジアでは類例をみない。完全に同じ文様ではないが、イラン・ニシャープールの Sabz Pushan にある10 世紀後半の墳墓の壁土の刻文 (Blair 1992: 227, illustration 24, 26) や、同じくイランのダームガーンの東にある Mihmandust の1096-7年のアブー・ムハンマド・ブン・アリー (°Abū Muḥammad b. °Alī) の墓塔 (Ibid.: 270, illustration 126)、ウズベキスタンの Kermine (ブハラとサマルカンドの中間に位置する) の1078-9年修築の Ribat-i Malik の門に類似の六角形と菱形の鎖紋様が見える (Ibid.: 259, illustration 102)。

碑文1の字体はややぎこちなく不慣れな筆跡に見えるが、碑文2は流麗な書体である。全体的にみて、碑文1はイスラム碑文の伝統にあまり馴染んでおらず、碑文2はイスラム碑文の伝統に則りつつ独自のスタイルを確立している印象を受ける。

碑文テキスト内容については、いずれもある種のルールに則って記されているように見える。中国のアラビア語墓碑では多くの場合、①冒頭にバスマラ (Basmala) ないし『クルアーン』章句やムハンマドの聖伝承等、宗教的な定型句が連なる。バスマラ、『クルアーン』章句、ムハンマドの聖伝承、といった具合に出てくる順番はその重要度に従っているように思われる。以下に、墓主についての記述がはじまる。その内容はおおむね、②墓主の言行や人となりを称賛・形容する語や表現、③墓主の肩書 (アミール、ハージー、シャイフなど地位を示すものなど) と名前 (イスム [実名]、ラカブ [尊称]、クンヤ [添え名]、ニスバ [出自名] など一順不同一)、④日付、⑤墓主のための祈り文句、といった順に記される。

碑文1の場合は B 面がこの方式で、①は1~3行目、②は4~8行目、③は9行目、④は10行目である。⑤は9~10行目に墓主の名前の後ろに挿入される。

碑文2の場合は A 面がこの方式で、①は1~4行目、②は5~9行目、③は9行目、④は11行目、⑤は10行目と12行目にみえる。

この順番は基本的には他の地域のイスラム碑文とも共通する。しかし、中国の場合、比較的行数が多く、そのぶん①②の分量が多めに感じられる⁴⁾。①②の内容は、ほぼ定型句となっていて、おおむね一字一句変わらずに記される。次章では、これら①②の定型句について、分析を加えてみたい。

3. 定型句の分析

2通の揚州アラビア語墓碑のテキストに引用されている聖典章句に着目すると、碑文1 (捏古伯碑文) の B 面第2行および碑文2 (シャムス・ウッディーン碑文) の A 面第1行に『クルアーン』第3章第182/185節がみられる。以降、これを定型句 T (「死

4) イランのマーザンダラーン地方のラージーム出土のヒジュラ暦413年(?) /1022-23年の墓塔などイランの墓塔の例ではバスマラに続いてすぐ③墓主名がくるものが目立つ (Blair 1992: 88)。ちなみに本稿で言及したレランの碑文では3行目から③がはじまるが、ピントゥアンの碑文では7行目からはじまる。いずれの碑文も後述のように墓石の来歴について議論がある。

の味を」Cor. III:182/185) と略記し、次章で詳細に分析を加える。碑文2の B 面は『クルアーン』第107章第1-4節そのままである。

また、碑文テキストにおいて預言者ムハンマドの聖伝承（ハディース）であることが示唆されている「さすらい人として逝った者は殉教者として亡くなった」および類似の「さすらい人の死は殉教である」という言葉がみられる。前者は碑文2の第3行に、後者は碑文1の B 面第3行および碑文2の A 面第5行にみえる。これらを本稿では E という記号で表し、前者を E(I)、後者を E(II) と略記することとする。後述のように、これらの祖型とみられる E(0) の存在が確認できる。また、これらのもととなったムハンマドの聖伝承を E(A) と略記する。言い回しのよく似た言葉が泉州の無紀年のアラビア語墓碑に1例だけある (Chen et Kalus 1991: 193-194, no. 114)⁵⁾。

特に『クルアーン』の章句や、ムハンマドの言葉という指摘はなされていないが、一種の定型表現と思われるものとして、碑文1の B 面第4行「かれはこの世を捨てて、主の慈悲の下に至った」、同じく第5行「かれは一時の住処から永遠の住処に移った」という言葉がある。また、碑文2の A 面第5行「かれはこの世界から永遠の世界に移った」、「現世より来世を選んだ」、「前者より後者へ傾いた」という言葉も同様の表現として注目される。これらは②墓主について述べる部分に現れる。上述のムハンマドの伝承と並んで泉州出土のアラビア語墓碑にもよく見られるものである。これらを F と略記する。

以上の定型句は、杭州・福州・惠安・泉州・広州および東南アジア・中央アジア・中東・アフリカなど各地で出土のアラビア語碑文で、どのように現れるのか。次章以下において、特に上述の『クルアーン』章句およびムハンマドの伝承について他地域の碑文との比較考察を加えることで、中国沿海部と他地域のつながりを探ってみたい。

(1) 定型句 E「さすらい人」

まず、揚州碑文1, 2にみられる「さすらい人の死」を殉教者と位置付けるムハンマドの伝承について見てみよう。それは次のような定型句であった。

E(I)	さすらい人として逝った者は殉教者として亡くなった من مات غريبا فقد مات شهيدا
E(II)	さすらい人の死は殉教である موت الغريب شهادة
E(0)	さすらいの死は殉教である موت غربة شهادة
E(A)	さすらいの殉教者 الشهيد الغريب

5) ‘神への愛ゆえさすらい人として逝った者は殉教者として亡くなった’
‘من مات من العشق غريبا فقد مات شهيدا’

これら(I)、(II)の定型句は、中国沿海部の揚州・杭州・福州・泉州・広州出土のアラビア語墓碑に共通してみられることが指摘されている(陸2000)。ここでいう「さすらい人の死」と結びつけられる殉教者(シャヒード)の概念は、当時のムスリムにとっては普遍的なものである。イスラームの伝統において「殉教」のカテゴリーは多様なタイプに広げられてきた。その中には、(a)神に仕える過程で殺害されることや、(b)信条のために死ぬこと、(c)病気や事故で亡くなること以外に、(d)故郷を遠く離れて死ぬこと(*shuhadā al-ghurba*)も含まれている。さらには(e)特殊なタイプの自然死や(f)生ける殉教までもが含まれる(*EI*, vol. 9: 205-206)。

異なる中国港市に散居するムスリム集団がまったく同じムハンマドの言葉を共有していることは、ある種のディアスポラ型のムスリム・コミュニティが形成されていたということを意味するだろう。この伝承が中国沿海部のみで確認されることから、中国におけるムスリムたちのディアスポラ・アイデンティティの芽生えをここに見ることができそうである。

しかしながら、「さすらい人の死は殉教である」というのはムスリム社会ではどこにでもある普遍的概念であったという見方もある。したがって、さすらい人と殉教者とを結びつける考え自体は、当時の中国ムスリムにとって特別に真新しいことではなかった可能性もある(莫爾頓 [Morton] 2015: 12, note 4)。

ただし、この問題を一般論で片づけてしまう前に、中国以外の地域で、中国の例よりも早い時期に、類似の聖伝承が本当にどこにもなかったのかどうか、確認する作業を行う必要がある。筆者は、イブン・マージャ Ibn Māja (d. 887)『キターブ・アル=スナン』*Kitāb al-Sunan* (以下、『スナン』)に類似の聖伝承を見出すことができた。それが E(0) である。

『スナン』は多くの信ぴょう性の「弱い」ハディースを含んでおり、先行の5つのハディース集に見えないものはすべて偽物であるとすら言われる。しかしとくにイブン・マージャと同じカズウィーン Qazwīn (テヘラン北西にある)出身の一部の学者たちはかれの『スナン』を最高權威とみなしていたという(*Concordance*, tome 8: 472; Ibn Māja, *Kitāb al-Sunan*, ‘Kitāb al-Janā’iz’ [The Book of Funerals], 61-1613)。『スナン』はアル=カイサラーニー al-Qaysarānī (d. 507/1113)によって「六書」に数えられたが、それらはマグリブ地域では認知されていなかった(*EI*, vol.3: 856)。本稿の問題関心から言えば、イランの一部を除く中東では一般的ではなかったこの伝承が、はるか東方の中国に伝わり流布したという点に、この伝承の際立った特徴がある。ジョージ・レーンは、カズウィーンのエリート層がモンゴルと結びつき、帝国のイラン併合に果たした役割に言及しており、カズウィーン出身者の存在はモンゴル政権において特殊な意味をもつかもしれない⁶⁾。

6) 蘭恩2011: 141-142。カズウィーンは近隣のイスマイル教団の攻撃に苦しんでおり、その町の大法官シャムス・ウッディーンはトランスオクシアナ遠征に従事していたのちの皇帝モンケと接触している(ドーソン1973, 4: 140)。これによってモンケは即位後、弟フレグを派遣してイ

この伝承の中国への伝播過程を探るうえで興味深い言葉を含んだアラビア語墓碑が泉州にある。その言葉が E(A) である。この言葉はあきらかに E (0)、E (I)、E (II) の定型句と内容的に関連性を有している。こちらは泉州出土の1272年の紀年をもつアラビア語墓碑のみに見えるのであるが (Chen et Kalus, 1991: 158-159, no. 75, Pl. XLII b)、E (I) をもつ墓碑の最古の出土例は泉州出土で紀年は1290年、(II) は揚州で紀年は1302年である。したがって、現時点の出土事例から判断すれば、この E(A) をもつ碑文の紀年は E(I)、E(II)のいずれよりも古く、祖型である可能性がある。

イブン・マージャの『スナン』が今のところ確実なひとつの由来であるこの言葉が、いったいどういうルートで泉州に辿りついたのか、明らかにすることは難しい。この言葉に類するもので、中国における最も早い事例である (A) の銘文をもつ墓碑の特異な背景は示唆的である。まず、この墓碑が刻まれた1272年は泉州での宋元交替の4年前であり、墓主はホラズム王の子ムハンマド・シャー (Muḥammad Shāh b. Khwārazm Shāh) であると記す。そして、この墓碑は泉州東郊の霊山聖墓で発見された。そこには泉州にはじめてイスラムを伝えたとされるムスリム聖人が祀られており、泉州ムスリムのアイデンティティの拠り所となる特別な場所である。

アム河下流のホラズム地方に興ったホラズム朝は、第7代スルタンのアラー・ウッディーン・ムハンマド (r. 1200-1220) のとき大いに勢力を拡大したが、1219年よりモンゴルの攻撃を受けて壊滅し、アラー・ウッディーンは逃亡生活の末、カスピ海上の島 (おそらく Āshūr-Āde 島) で1220年1月に病死した (Barthold 2012: 426)。その後も、アラー・ウッディーンの子ジャラル・ウッディーン・マングビルディーがインド・イラン・イラクなど各地を転戦して抵抗を続け、チンギス・カン死後の1231年に北イラクで死亡した。家島彦一は (A) の言葉をもつ墓碑を紹介し、墓主であるホラズム・シャーの子ムハンマド・シャーとは、「ジャラル・ウッディーンその人か、あるいは彼の兄弟の一人であると考えられる」と述べる (イブン・バットウータ1999: 3)。しかし、ドーソンはジャラル・ウッディーンの他界により、「ホラズム・シャー王朝の男統はまったく絶滅し」たという (ドーソン 2: 105)⁷⁾。

スマーイル教団を滅ぼした。

- 7) ホラズム朝スルタン・アラー・ウッディーンに所領を与えられた3人の王子ルクン・ウッディーン・グールシャーンチー、ギヤース・ウッディーン・ビールシャー、ジャラル・ウッディーン・マングビルディーがいたが (ドーソン1: 168)、ルクン・ウッディーンは1222年にモンゴルへの服従を拒み家族とともにことごとく殺された (ドーソン1968, 1: 301)。ギヤース・ウッディーンはイスマール派のもとに走ったのち、キルマーン地方に亡命しグヴァーシールで母と従者500人とともに殺された (ドーソン4: 35)。これらとは別にジャラル・ウッディーンとともにスルタンに従い、その死をみとった2人の王子末弟ウズラグ・シャー (ʿUzlaḡh Shāh)、アーク・シャー (ʿĀq shāh)がいた。前者はスルタン位後継者とされたがその地位をジャラル・ウッディーンに譲った。この2王子はジャラル・ウッディーンとともに首都ウルゲンチに入ったが、モンゴルの攻撃を受け1221年に捕らえられて殺された (Barthold 2012: 438)。ナサウィー (Nasawī) によれば、スルタン・アラー・ウッディーンにはさらに幼い王子たがおり、マーザンダラーンでスルタンの后とともに捕えられたのちすべて殺された (Barthold 2012: 431)。また、同年、ジャラル・ウッディーンがインダス川を渡った際、彼の7・8才の息子も捕らえられて殺されたという (Ibid: 446)。ただし、ジュワイニー (Juwaynī) によればジャラル・ウッディーンがイン

家島によれば、ジャラル・ウッディーンの後、彼が生存しているとする英雄伝説が各地に広がった、という (Ibid)。ジュワイニーによれば、スルタン・ジャラル・ウッディーンはクルド人の盗賊に殺されたという話があり、彼の衣服を着ていたクルド人たちは処刑され、スルタンと思しき人物が墓に埋葬された。ところが、じつはそれらの衣服はスルタンの従者のものであり、スルタン自身はスーフィーの勧めによりぼろをまとしてイスラムの人々の地をさすらったという説もあるという。スルタン・ジャラル・ウッディーンの後、イラクでスルタンの目撃情報がひき続き、そのたび喜びに沸いたという⁸⁾。

泉州のホラズム・シャー碑文の存在は、まだ征服されていなかった南宋領の港町泉州にホラズム朝スルタンの一族を名乗る人物が流れ着いたこと、または、そういう噂が伝わっていたことを示すだろう。碑文に見える言葉 E(A) 「さすらいの殉教者」とはジャラル・ウッディーンその人を指す言葉であり、カリスマ的英雄ジャラル・ウッディーンの生存伝説とかかわるものかもしれない。海を渡るスーフィーたちがそうした伝説を泉州に伝えた可能性もあるだろう。

表1. 定型句 E- (I)~(III) の銘文をもつ墓碑の出土例

出土地	揚州 1 [1310], 杭州 2 [1317 & n.d.], 泉州 14 [1272-1366], 広州 1 [1349/50] ⁹⁾
ニスバ	大都/高麗(中国北京) 1 [1349/50], <u>Khanbaliq</u> (中国北京) 1 [n.d.], <u>Almaliq?</u> (中国新疆) 1 [1290], <u>Bukhara</u> (ウズベキスタン) 1 [1302], <u>Khwarazm</u> (ウズベキスタン/トルクメニスタン) 1 [1272], <u>Iṣfahān</u> (イラン) 1 [1317], <u>Qazwīn</u> (イラン) 1 [n.d.], <u>Shahristān</u> (イラン) 1 [1325], <u>Jerusalem</u> (イスラエル) 1 [1310]

地名のうしろの () は現在の国名など、つづく数字は出土件数、[] はその出土地の出土墓碑の紀年のスパンを示す。

中国出土のほぼ元の時代の紀年をもちニスバの記されるアラビア語墓石32件のうち、旧ホラズム朝支配領域のイラン・西トルキスタンの地名をニスバとするものは17件にのぼる。泉州にアラビア語墓碑を残した13~14世紀の外来ムスリムたちの大多数が海上ルートでの移民だったわけではない。多くの旧ホラズム朝出身者が元に

ダス渡る前に、子供たちに別れを告げる場面があり、その子供たちの運命は不明である (Juvaini 1958: 410)。

8) また、ヒジュラ暦633 (1235-6) 年にマーザンダラーン地方のUstundār (Rustamdār) でスルタン・ジャラル・ウッディーンを名乗る反乱者が嘘をついたかどで処刑された。652 (1254-5) 年にはオクサス (アム) 川のほとりで船頭たちにスルタンである告げた男が捕らえられたが、そのものは死ぬまで主張を曲げなかったという (Juvaini 1958: 459-460; ドーソン4: 68)。

9) この広州出土のアラビア語墓碑は漢文テキストももつ。大都 (北京) 出身の高麗人である (中 1989: 91)。

仕え内陸アジア経由で中国にやってきて中央・地方行政を担う一方、商人としても活躍した。拙稿で論じたように、当時イランのムスリムの間で抑圧的で野蛮なホラズム朝の評判は芳しくなかった¹⁰⁾。多くのホラズム遺民を含む元代中国のムスリムがホラズム王の家族に対して単純に忠誠を示したと考えるには障碍がある。しかし、英雄的な活躍をしたジャラル・ウッディーンその人は死後も伝説となり、その名を騙る者も出るほど人気があり、また各地を転戦したことは「さすらい人」の性質をもつ。ホラズム・シャーの子ムハンマド・シャーの墓は、ジャラル・ウッディーンの伝説とあいまって「さすらいの殉教者」の墓として、泉州のムスリムたちに崇敬され得たであろうし、かれらのディアスポラのアイデンティティを象徴する言葉となりえたのである。結果として、この墓碑は泉州で特別な位置づけをもち、そこに刻まれた『スナン』に由来するであろう言葉 (A) が、ホラズム朝出身者を含む中国沿海部のムスリムの間で、定型句 (I)、(II) が受容され、共有されていったのではないか。

以上の (I)、(II) を有する墓碑の出土地を示したものが表1である。すでに述べた通り、分布は中国東南沿海部に限られる。また、ニスバが指し示す地名の分布を地図に示す(地図2)。

(2) 定型句 T「死の味を」 (Cor. III:182/185, XXI:36/35, XXIX:57)

次に、揚州碑文1、2にも共通してみられた『クルアーン』第3章第182/185節について見てみよう。じつはこの章句は『クルアーン』第3章第182/185節だけではなく、ほかに第21章第36/35節と第29章第57節にもみえるので、いずれを刻まれたものなのかはケース・バイ・ケースで判断する必要がある。

T. 誰でもみんな一度は死の味を見ねばならぬもの
كل نفس ذائقة الموت

この『クルアーン』章句は、中国沿海部の碑文でも多数確認することができる。表2上段に列举した都市から出土している墓碑に確認される。

次に、この『クルアーン』章句をもつ中国沿海部出土のアラビア語碑文のニスバを表3の中段に示す。

また、筆者がデータを収集した範囲外で利用可能なデータとして、先に述べたイスラム碑文シソーラス (Thesaurus d'épigraphie islamique) というオンライン・データベースを利用できる。そこから得た (Cor. III: 182/185) および類似の章句を含む碑文の出土地は、表2下段に示す。

10) ホラズム朝の崩壊により混乱を招いたし、ホラズム軍には凶暴さや蛮行の噂もあったためである (Lane 2003: 184, 209)。さらに、ホラズム朝のアラー・ウッディーン・ムハンマドがアッバース朝カリフを攻撃したこともその理由である (Barthold 1900 [Reprint, 2012] : 374-375; Boyle 1968: 293; Lane 2003: 184, 195)。

表2. 定型句 T の銘文をもつアラビア語墓碑の出土例

中国	揚州 2 [1310, 24], 杭州 2 [1317 & n.d.], 泉州 31 [1301-66]
	ニスバ : <u>K</u> hanbaliq (中国北京) 1 [n.d.], Ḥanalaq (<u>K</u> hanbaliq ハンバリク = 中国北京?) 1 [1303], Zaitun (中国泉州) 1 [1322], Almaliq ? (中国新疆) 1 [1324], Balasagun (キルギス) 1 [1301], Iṣfahān (イラン) 1 [1317], Fāl ¹¹⁾ (Sīrāf, イラン) 1 [1363], Tihāma (アラビア) 1 [1336], Jerusalem (イスラエル) 1 [1310]
東南アジア	なし
その他	Iskodar (タジキスタン) 1 [1430/1], Pays (ロシア) 1 [1310/1], Nižnije Jaki (ロシア) 1 [1344/5], Jamašurma (ロシア) 1 [1381/2], Marāgha (イラン) 1 [1167/8], Kāzerūn (イラン) 6 [1055/6-1284/5], al-Ṭūr (イスラエル) 1 [1213/4], al-Qāhira (エジプト) 3 [1284/5-1324/5], Gao (マリ) 3 [1106/7-1300/1] ※16世紀前半のロシアの出土例3件は省略 http://www.epigraphie-islamique.org/epi/login.html (2017年9月閲覧)

地名のうしろの () は現在の国名など、つづく数字は出土件数、[] はその出土地の出土墓碑の紀年のスパンを示す。

この銘文の内容は直接死に関連するものであり、この言葉を墓碑に刻むという発想はごく自然におこりうる。したがって異なる地域に使用例が認められるとしても、偶然の一致である可能性を排除できない。ところが、そのような事情を考慮しても、この『クルアーン』章句の分布は、いささか特異であり、偶然の同時発生よりは、伝播した可能性を示唆するようにおもふ。

この章句を墓碑に刻む地域を視覚的に表すため、地図上にこれらの地名を落としたものが地図3である。14世紀の時点では、この『クルアーン』章句をもつ墓碑は、内陸ユーラシア的な分布を呈するように見える。その年代を子細に見ると、より早い時期のものに着目すると、イラン・エジプト・イスラエルの出土例 (12・13世紀の紀年をもつ) が、中国 (14世紀前半が大半) よりも早い紀年を有していることが見て取れる。この章句を墓碑に記す習慣は、これら中東地域に由来するかもしれない。

中国沿海部における出土地の偏りも注目に値する。泉州以南ではこの銘文をもつ例が発見されていないということは、このような銘文文化の伝統が海域的というよりはユーラシア的な伝播傾向をもっていたことを示しているのではないか。中国沿海部にアラビア語墓碑を残した13～14世紀の外來ムスリムたちのほとんどが海上ル

11) Fāl はイランの Fārs 地方 Sīrāf あたりを指す (Chen et Kalus 2011: 163, no. 79)。

ートでの移民だったというイメージは再考が必要であろう。

無論、中国沿海部出土のアラビア語墓碑に海域的な要素がないわけではない。表3(下段)でカーゼルーン出土のアラビア語墓碑に『クルアーン』第3章を有するものが6件にのぼり、そのタイム・スパンが1055/6年から1284/5年であり中国沿海部の例より早い時期のものであることは注目に値する。カーゼルーンはインド洋の海上商人たちの信仰を集めたスーフィー教団カーゼルーニーヤの開祖の出身地であり、ムスリム海上交易と結びつきのある都市である。こうした海域的なつながりを探るべく、中国沿海部出土のアラビア語墓碑にみられるもうひとつの『クルアーン』章句に着目してみたい。

(2) 定型句 F「儚く消え」(Cor. LV:26-27)

『クルアーン』第55章第26-27節は、揚州碑文1, 2にはみられなかったもの、他の中国沿海部のアラビア語墓碑にはよくみられる銘文である。この『クルアーン』章句は、13・14世紀頃のものともみられる海南島出土のアラビア語墓碑群にみえ、また、15世紀にかけて東南アジアのアラビア語墓碑にも多くみられるという点で、上に見た『クルアーン』第3章第182/185節、第21章第36/35節、第29章第57節とは対照的な分布を示している。この銘文の広がり、海域におけるムスリム・ディアスポラと何らかの関係性を有するのではないか。このような問題関心のもと、最後にこの『クルアーン』章句を有するアラビア語墓碑の出土地分布を分析してみたい。

F. 地上のものはみな儚く消え、永遠に変わらぬは威風堂々たる主の御顔のみ
 كُلُّ مَنْ عَلَيْهَا فَانٍ وَ يَبْقَى وَجْهَ رَبِّكَ ذُو الْجَلَالِ وَ الْاِكْرَامِ

ここまでと同様に、この『クルアーン』章句を有するアラビア語墓碑の分布を表3に示す。

表3. 定型句 F の銘文をもつアラビア語墓碑の出土例

中国	泉州 32 [1206/7 (?) -1350], 惠安 1 [n.d.], 広州1 [1349/50], 海南島7 [n.d.]
	ニスバ: 大都(中国北京)/高麗1 [1349/50], Ḥanalaq (Khanbaliq ハンバリク=中国北京?) 1 [1303], Qazwīn (イラン) 1 [1274(?)], Tūs (イラン) 1 [n.d.]
東南アジア	Bình Thuận (ベトナム) 1 [1039], Bandar Seri Begawan (ブルネイ) 1 [n.d.], Leran (インドネシア・ジャワ島) 1 [1082], Kuta Kareueng-Pasai (インドネシア・スマトラ島) 3 [1438-46], Tungku Di Hagu-

	Pasai (インドネシア・スマトラ島) 3 [1450-3]
その他	Vanand (アゼルバイジャン) 1 [1368/9], Shavvāz (イラン) 1 [1196/7], Kāzerūn (イラン) 4 [1101/2-1266/7], Bafra (トルコ) 1 [1381/2], al-Qāhira (エジプト) 4 [1284/5-1408/9], Shālla (モロッコ) 1 [1306/7], Gao (マリ) 1 [1300/1] ※16世紀半ばのロシアの出土例7件、アゼルバイジャンの出土例6件は省略 http://www.epigraphie-islamique.org/epi/login.html (2017年9月閲覧)

地名のうしろの () は現在の国名など、つづく数字は出土件数、[] はその出土地の出土墓碑の紀年のスパンを示す。

表3からうかがえることは、まずこの銘文を墓碑に刻む例はかなり比較的早い時期にはじまるということである。泉州のものは紀年が1206/7年(ただし摩滅のため紀年は不確実性をもつ)と中国出土のアラビア語墓碑群のなかでも最も古い例のひとつである(紀年はないがより古いとされる海南島出土のアラビア語墓碑の例などもある)。ただ、この銘文も死に関連する内容であることから、この言葉を墓碑に刻むという発想は自然なものと考えられ、異なる地域に使用例が認められるとしても、偶然の一致である可能性を排除できない。表4を眺めると、東南アジアのベトナム(ビントゥアン―ただし、『クルアーン』の言葉そのままではない)とジャワ(レラン)の早さが際立つが、これについては後述のように検討すべき問題がある。中国の出土例をみたとき、泉州・広州・海南島の三垂とより福建以南に限られることは、この銘文の文化が南方海域的なひろがりをもつことを窺わせる。中国出土墓碑にみえるニスバをみると、泉州出土のものは(詳細不明の Hanalak のほか)、イランのカズウィーン、トゥース(ホラーサン地方)がみえ、イランとの海域文化交流の可能性が注目される。関連して、イランとエジプトが13世紀までにすでに『クルアーン』第55章第26-27節を墓碑に刻む文化を有していたことが注目される。この銘文を墓碑に刻む習慣は、かなり早い時期に海域交流を通じて伝播したのではないか。

東南アジアはこの海域交流にどのような位置を占めているのか、という問いに関連して、表3において最も早い紀年をもつビントゥアン(Binh Thuận、ベトナム)とレラン(Leran、インドネシア・ジャワ島)の出土例が注目されるが、近年、フランスのクロード・ギョーとルトヴィック・カルスの研究で、これらの墓石はもともと他の地域に立てられていたものであったが、そこに刻まれた年よりずっと後の時期にこれらの地に運び込まれたのであるという可能性が指摘されている。本稿の考察対象から除外するかどうかは、結果に大きな違いをもたらしうるので、慎重な検討が必要である。ビントゥアンの碑文についての再検討は現在進めているところであり、結論は別の機会にゆずりたい。レランの碑文については拙稿で論じたことがあ

る。その後、少し補足すべきことが生じたので、再度ここで触れておきたい。

まずレランの碑文について、これまでの説を整理する。ジャワ島東部のスラバヤ近郊にあるレランの碑文は、現地の伝承では、ジャワにイスラムを布教した九聖人(Wali Songo)の筆頭であるマリク・イブラヒムの娘プトリ・スワリの墓廟と関連づけられてきた。ところが、オランダのJ・P・モケット(Moquette 1921)が当該碑文とプトリ・スワリとはまったく無関係であることを示し、墓石の地質学的分析なども加え、この碑文が他地域から運び込まれたものである可能性を示唆した。これに対し、フランスのポール・ラヴェッスは新たに研究を発表し、この碑文の墓石を現地産であると主張した(Ravaisse 1925)。しかし、その主張にはやや無理やりな面がみられる。それ以降、しばらく研究の進展をみず、レランの碑文の位置づけは不確定な状態となり、レランの碑文はジャワへのイスラムの伝来の証拠としては控えめに扱われてきた。そして近年になって、フランスのクロード・ギョーとルトヴィック・カルスが再度、テキストの読み直しと墓石の地質学的分析を本格的に行い、レランの墓石は外地より海路でもたらされたものであると結論づけた(Guillot et Kalus 2004; Kalus & Guillot 2008)。これにより、モケットの説が再び浮上することになる。

モケットは、レランの墓石は(インドからではないものの)アラビアなど乾燥地域から運ばれてきたものではないかとし、紅海沿岸のアビシニアの碑文との字体の近似性を指摘する。これに対し、ギョー&カルス論文では、モケットと同様、外部からもたらされたとみるが、新たにイスラム碑文シソーラス(Thesaurus d'épigraphie islamique, <http://www.epigraphie-islamique.org>)を駆使し、テキスト(Cor. LV: 26-27)は上エジプトと共通、書体はイランと近似するという分析結果を得た。そして、レラン碑文は、ヒジュラ暦475年(1082 CE)にイスラム世界のどこかで作られたのち、レランが貿易港として機能していた12～14世紀の間に船のバラストとしてジャワ島に運ばれて来たと推定した。その根拠は、①レランの墓地に残された他の摩滅した墓石がレラン碑文と同じ材質・デザインで一連のものとみるべきであること、②うち一つには礎石とされたらしい加工があること、③地質学者の見解でレランの墓石は灰青色の大理石でありジャワ産ではないとみられること、④石の傷み具合は海水によるものとみられること、である。

筆者はモケット論文の訳注に付した補論において、ギョー&カルス論文によってエジプトないし上エジプトと結びつけられた『クルアーン』第55章第26-27節の章句は、スマトラ島北部のパサイや中国の泉州出土の墓石にも多数見られると指摘した(Guillot & Kalus 2008: 153, 158, 172-4; Chen et Kalus 1991, Nos. 15, 17, 23, 27)。そして、それを海域的ひろがりの可能性として考えている。

ただ、パサイや泉州の墓石は前者が13世紀後半から14世紀半ば、後者は15世紀半ば頃のものである。1100年の時点では、アジアの沿海地域へのイスラム墓碑文化の広がりには限られていた(Kalus & Guillot 2004: 35)。この時期的条件の下でこの章句をもつ墓石の例は、エジプトないし上エジプトが主であるので、ギョー&カルス論

文がレラン碑文にみられる『クルアーン』第55章第26-27節の銘文の淵源をそこに結びつけることは妥当と評価できるとおもわれた¹²⁾。

ところが、イスラム碑文シソーラスには、2017年1月の第14次更新時点では、イランのカーゼルーンの出土碑文が収録されており、表3で示した通り、筆者が2017年9月にこの章句（『クルアーン』第55章第26-27）を検索したときには、カーゼルーン出土碑文にこの用例があることが確認できた。したがって、ギョー&カルス論文の結論にいったん留保をつけ、(表4によれば、東南アジアの次に最も古い出土例を含む) イランがこの銘文の由来に関して、あらたな候補地として浮上する。とくに11・12世紀という早期に属する碑文が出土するイランのカーゼルーンが注目される。

先に見た「誰もみんな一度は死の味を…」(『クルアーン』第3章第182/185節、第21章第36/35節、第29章第57節)の銘文をもつアラビア語墓碑の出土例も、同じくイランのカーゼルーンが多く、その紀年も古かった。中国のアラビア語墓碑の文化とカーゼルーンのそれとの間には関係性が想定されうる。

カーゼルーンはインド洋の交易ネットワークとの繋がりが深い都市である。家島彦一は、イブン・バットゥータを引用しつつ、カーゼルーンに住むスーフィー聖者アブー・イスハーク (°Abū °Ishāq °Ibrāhīm b. Shahriyār al-Kāzarūnī) なる人物が、インドや中国との間を航海するインド洋の船乗りたちに広く尊崇されたことを紹介する。

イランの Kāzarūn 出身のシャイフ °Abū °Ishāq は彼の弟子たちを派遣して、インドと中国に至るインド洋の航海上の重要拠点にスーフィー・タリーカのネットワークを築いた。Ibn Battūṭa によると、南インドの Qāliqūt、Kūlam や中国の泉州 (Zaytūn) などの主要な港市には、°Abū °Ishāq の弟子たちによって立てられたザーウィヤがあった。ザーウィヤは、彼らスーフィーたちの宗教的勤行をおこなう修道場であり、同時にペルシャ湾岸・インド・中国を往来するインド洋の海上商人たちが旅の安全を祈願したり、宿泊場所として利用された (家島1991: 127)。

このスーフィー・タリーカ (教団) のネットワークはカーゼルーン人たちによって担われていた。イブン・バットゥータによれば、南インドのカリカット (Qāliqūt) のザーウィヤの長はカーゼルーン人のシャイフ Shihāb al-Dīn であり、クイロン (Kūlam) には彼の息子シャイフ Fakhr al-Dīn のザーウィヤがあった。そして至正10年 (1350)、中国・泉州のモスク清浄寺を修築したことを記す碑文にその名が見える夏不魯罕丁は、イブン・バットゥータが記す泉州のシャイフ Burhān al-Dīn al-Kāzarūnī に相違ない。家島彦一は、この人物はアブー・イスハークの教団 (カーゼ

12) 810/811 CE から ca. 1106 CE までの79件のイランおよびトランスオクシアナの初期イスラム碑文のなかにレランの墓石にみえる『クルアーン』第55章第26-27節の章句をもつものは見いだせない (Blair 1992)。

ルーニーヤもしくはムルシディーヤという) の派遣員で、泉州にある同教団のハーンカー (スーフイーの修道場) の長であったと推定している (イブン・バットゥータ7: 82, 注75)。

さらに、14世紀当時、インド西北のグジャラート地方の港市キャンベイ (Cambay) にはカーゼルーン出身の「商人王」(malik al-tujjār) の存在が知られている。その商人の名はザキー・アッダウラ・ワ・ウッディーン・ウマル・ブン・アフマド (Zakī al-Dawla wa-l-Dīn °Umar b. °Aḥmad) という。ヒジュラ暦734年 (1333/34) に没し、彼の墓廟がキャンベイの大モスクに隣接する墓地にあるが、その様式はスマトラ島のスムトラ・パサイ王国スルタンのザイン・アル=アービディーンの王女ミフラスィヤフ (1428年没) の墓廟と同じ様式である (イブン・バットゥータ6: 97)。そして、それはヒジュラ暦822年 (1419/20) のジャワ島のグルシック (Gresik) にある「九聖人」のひとりマリク・イブラヒムの墓廟 (Juynboll 1911; Moquette 1912a, 1912b, 1923) ととも一致している。＜イラン＝グジャラート地方＝スマトラ島＝ジャワ島＞の海を通じた交流関係の証左といえる。

「九聖人」(Wali Songo)とは、15世紀の始めから16世紀末にかけてジャワの各地でイスラームの伝道に功績のあった一群の人々であるが、こうした聖人のなかにはアラビア、ペルシャ、インド、中国の出身とされる者がいたという (中村1991; Fedelspiel 2007: 62)。例えばそのひとりで、マリク・イブラヒムの孫にして、九聖人のスナン・アンペルの子、同じくスナン・ボナンの兄弟であるスナン・ドゥラジャト (Sunan Drajat [1470～]) は、トゥバンのマジャパイト王族と中国人の子孫とされる。ガムラン音楽を作曲してイスラームを布教したことでも知られる。東ジャワ州ボジョネゴロ県にあるかれの墓廟に併設される博物館 (Museum Khusus Sunan Drajat) には近辺で出土した中国銅銭や中国陶磁の陶片が展示され、かつての交易関係を物語る。かれらの伝道によって崩壊に導かれたとされる最後のヒンドゥー・仏教王国マジャパヒトの王都トロウランのイスラーム墓園マカム・トロロヨ (「死者の広い土地」の意) からは、ブトリ・クンチャナ、デヴィ・アンジャスモロといったマジャパイト王族のものをはじめ14世紀後半の没年を刻んだジャワ人ムスリムの墓碑が多数発見されている (Ricklefs 2006: 12-15)。マカム・トロロヨの墓碑群の紀年 (没年) のタイム・スパンは、1376-77年から1475-76年に及ぶ (Ricklefs 2006: 13)。中国沿海部の泉州・揚州・杭州・広州にみられるアラビア語墓碑のタイム・スパンは1173年 (1129年?) ～1371年となっており、多くがモンゴル帝国支配期の1270年代～1360年代に集中している。両者が入れ換わるように増減したことは、この南方海域における交易構造の変化にともなうムスリムの移動・拡散を反映するであろう。

カーゼルーン教団をはじめイスラームの特定の学派やスーフイー教団が、墓碑における特定の銘文の選好と関わるのかどうか、興味深い問題である。改めて「地上のものはみな儚く消え…」 (『クルアーン』第55章第26-27節) の銘文を刻む墓碑の広がりと一緒に考えると、カーゼルーンやスマトラ島などをカバーしており、上記のスーフイー教団ネットワークの広がりとも重なるような印象がある。これに対して、

「誰もみんな一度は死の味を…」 (Cor.III: 182/185ほか) の銘文をもつアラビア語墓碑の出土例は東南アジアに見い出すことができていない。また、最初に分析した定型句 E の聖伝承の由来のひとつと考えられるイブン・マージャ『キターブ・アル＝スナン』が受容されていたカズウィーンでは、14世紀当時までスンナ派のシャーフィイー学派の信奉者が多数であったという (Barthold 1984: 209)。イブン・バットゥータによれば、14世紀半ばにインド・マラバール海岸のヒナウル (ホナーヴァル、Honavar) の町の住民は海上交易に従事し、シャーフィイー学派の教えに従い、海上で聖戦を行っていた。家島彦一によれば、シャーフィイー学派は10世紀以後、インド洋貿易の隆盛と共に東アフリカ、インド、東南アジア島嶼部などに広がり、イの海域世界を覆う国際法として重要な役割を果たした (Ibn Battuta 1994: 803; イブン・バットゥータ 6: 108, 158注56; *EI*, vol. 9: 185-189)。

おわりに

13～14世紀の紀年をもつ中国沿海部出土のアラビア語墓碑については、これまで個別の研究や訳注が多くなされてきた。しかし、その集合的な特徴をとらえ、これを他地域との関係性のなかで捉えようとする研究は、まだそれほど進んでいない¹³⁾。本研究は、そうしたイスラム碑文の比較研究の萌芽的な試みのひとつとして位置づけうるだろう。

本稿では、中国イスラム碑文の書式について、初歩的な考察を行った。モンゴル時代史の研究分野においては、蒙漢 (モンゴル語・漢語) 合璧碑文をはじめ多言語で記された碑文の比較研究の必要性が提起され (杉山1990: 3)、イスラム碑文の例では、カラコルムのハーンカーに関わる1340-41年のペルシャ語碑文について研究がなされている (宇野・村岡・松田1999; 磯貝・矢島2007)。そして、蒙漢合璧碑文の研究からは「世祖クビライ以後のパクパ文字モンゴル文およびその直訳体漢文で記された発令文は、文体・用語・内容ともに著しい定型化がみられる」という指摘がなされている (杉山1990: 104; 高橋1991: 421-423; 中村・松川1993: 15ほか)。本稿で取り上げた揚州出土碑文1は漢語とアラビア語をもつバイリンガル碑文であるが (命令文ではないし、また記述内容は一方が他方を訳したものでもない)、単純な比較はできないが)、とくに冒頭に定型句を多く重ねるというのは中国のアラビア語墓碑に目立つ特徴であり、これは元朝の多言語環境下において進行した、広い意味での書写言語の定型化・マニュアル化という趨勢のなかでの現象と捉えるべきなのか、それとも一般的なイスラム碑文文化の範疇内におさまるものなのか、検討する価値があるかもしれない。本稿で揚州出土碑文を例示しつつ抽出したアラビア語墓碑のテキスト構成は、他地域のそれと比較検討を進める際に、ひとつの指標となるであろう。

13) 陳達生はそうした研究の重要性を主張し、みずからも実践していたが、その後はあまり継承されていない (陳1991, 1992, 1993; 努爾 [陳達生] 1985)。

筆者の問題関心は、13～14世紀の海域ムスリム・ディアスポラの痕跡を探ることであるが、本稿ではその基礎作業として、移動するムスリムの集団がその習慣の伝播を担う媒介者であったと仮定し、ひとつの手がかりとして、墓碑に特定の定型句を刻む習慣が、中国沿海部とその他の地域とで、どのように重なり合っているか、をデータとして示そうと試みた。結果、定型句によってかなり異なる分布を示し、しかも、本稿で取り上げた3つの定型句がひとつの墓碑に表れるという例はなく、2つをひとつの墓碑がともにもつ例は14世紀以降のみに見られる。14世紀まで、異なる定型句をもちいる明確に異なる習慣をもつグループが存在していたことを示唆する。本稿で分析した3つの定型句ごとの分布の特徴をまとめると以下ようになる。

定型句 E(I)～(III)「さすらい人の死は殉教である」等については、中国でしかみられない。もっとも古い例は泉州である。しかし、現時点で筆者が知りうる範囲では、その由来、イランのカズウィーンでは受容されていたとみられるイブン・マージャ『キターブ・アル＝スナン』の聖伝承であるとみられる。基本的には中国のみで流通した伝承のように思われる。もっとも早い例は泉州のホラズム・シャーの墓碑であるが、ホラズム王族の泉州での客死という伝説が殉教性をもち、ホラズム朝出身者が多くいたであろう中国沿海部ムスリムの間で広まったものとみられる。13～14世紀の中国沿海部で「さすらい人」というアイデンティティが異なる都市の外来系ムスリムのコミュニティ間で共有されていたことを示しており、超地域的な「想像された」ムスリム・ディアスポラ存在の証左といえよう。

定型句 T「誰もみんな一度は死の味を見ねばならぬもの」(『クルアーン』第3章第182/185節、第21章第36/35節、第29章第57節) については、中国では14世紀に入ってからしか現れず、泉州以北でしか見られず、東南アジアの出土例はない。中国出土墓碑のニスバにも東南アジアの地名は出てこない。一方で、イラン（とくにカーゼールン）・イスラエル・エジプト・マリなどでは11世紀半ばから13世紀後半まで、中国よりも早い時期の例が多い。とくにイラン・イスラエルの地名は中国出土墓碑のニスバにもみえるので、それらの地域から中国に伝わったのかもしれない。中国への伝播の入り口は件数がもっとも多いことからして泉州かもしれない。ただし、この銘文は14世紀にはいるとロシアや中央アジアなど中央ユーラシア的なひろがりを見せることが注目される。

定型句 F「地上のものはみな儚く消え、永遠に変わらぬは威風堂々たる主の御顔のみ」(『クルアーン』第55章第26-27節) については、中国では泉州に13世紀（ただし紀年は摩滅のため一部不確実性をともなう）という早い段階から見られる。東南アジア（ベトナムとジャワ）の2碑文は11世紀という早い紀年をもつが、これについてはずっと後の他地域から運び込まれたものとする見方もあり、現段階では結論を出せない。これらを除外すると、イランとくにカーゼールンのこの銘文をもつ墓碑の出土例の紀年が早い。かなり早い段階（おそらく12世紀には）でこの銘文を墓石に刻む文化が海域的な広がりをもったであろう。関連する出土件数の多さから見て、イランから（東南アジア経由で？）海南島の三亜へ、そして泉州へという伝播ル

ートを想定しうる。ただし、ベトナム・ジャワの出土例の位置づけなど残された課題も多く、さらなる検討を要する。

本稿で行ったような、墓碑に刻まれたテキスト、とりわけ特定の『クルアーン』章句を用いる慣習の伝播に着目し、他地域の事例と比較する手法は、すでに最初期のJ・P・モケット、ポール・ラヴェッスらによってなされていた。近年は、オンラインの「イスラム碑文シソーラス」が公開されたことで、研究上の利便性は大幅に向上した。しかし、モケット、ギョーとカルスらは地質学者の助けを借りつつ、イスラム碑文の石質についても分析していたが、本稿ではそうした分析を行うことはできていない。そういった意味では、本稿の考察にはまだまだ不十分な点が多々あり、今後さらなる研究方法の洗練と分析の深化とを期したい。

[参考文献]

[クルアーン・ハディース]

井筒俊彦訳 (1957) 『コーラン』 全3冊, 岩波書店.

Ibn Māja (2000) *Kitāb al-Sunan*. 2 vols. (al-Kutub al-sittah). Third Edition, Riyadh: Dāl al-Salām, 2000.

[アラビア語・ペルシャ語史料翻訳]

イブン・バットゥータ, イブン・ジュザイイ編, 家島彦一訳注 (1996-2002) 『大旅行記』 1-7, 平凡社.

Juvaini, °Ata-Malik (1958) *The History of the World-Conqueror*. 2 vols. Translated from the text of Mirza Muhammad Qazvini by John Andrew Boyle, Manchester: Manchester University Press.

[辞書・索引]

El=Lewis, B., V. L. Ménage, Ch. Pellat, J. Schacht eds. (1971) *The Encyclopaedia of Islam, New Edition*. Leiden: Brill, London: Luzac.

Concordance=Wensinck, A. J., J. P. Mensing. (1992) *Concordance et indices de la tradition musulmane*. tome I-VIII. Reprint edition. Brill.

[二次資料]

日本語（あいうえお順）

磯貝健一・矢島洋一 (2007) 「ヒジュラ暦742年カラコルムのペルシア語碑文」『内陸アジア言語の研究』 22, pp. 119-156+pls.

宇野伸浩・村岡倫・松田孝一 (1999) 「元朝後期カラコルム城市ハーンカー建設記念ペルシア語碑文の研究」『内陸アジア言語の研究』 14, pp. 1-64+5pls.

杉山正明 (1990) 「元代蒙漢合璧命令文の研究 (一)」『内陸アジア言語の研究』 5, pp. 1-31+2pls..

——— (1991) 「元代蒙漢合璧命令文の研究 (二)」『神戸市外国語大学外国学研究』 6, pp. 35-55+2pls.

- 高橋文治 (1991)「太宗オゴデイ癸巳年皇帝聖旨訳註」『追手門学院大学文学部紀要』25, pp. 422-405.
- 陳達生 (1993)「中国沿海地域のイスラム」溝口雄三他編『アジアから考える [2] —地域システム』東京：東京大学出版会, pp. 167-188.
- ドーソン著, 佐口透訳注 (1968-79)『モンゴル帝国史』1-6, 平凡社.
- 中田吉信 (1980)「海外における中国イスラムの研究」『東方学』65, pp. 129-143.
- (1988)「中国におけるイスラム史の研究状況—宋元時代の史蹟研究を中心に—」『東方学』76, pp. 154-169.
- (1997)「元代のムスリム」『就実女子大学史学論集』12, pp. 69-222.
- 中村淳・松川節 (1993)「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』8, pp. 1-92+8pls.
- 中村光男 (1991)「東南アジア史のなかのイスラーム—秩序と変革—」『講座東南アジア学 第四巻 東南アジアの歴史』弘文堂, pp. 189-216.
- 家島彦一 (1991)「ムスリム海民による航海安全の信仰—とくに Ibn Battūta の記録にみるヒズルとイリヤースの信仰—」『アジア・アフリカ言語文化研究』42, pp. 117-135.

中国語（ピンイン順）

- 白寿彝・馬志祥漢訳 (1936)「杭州出土伊斯蘭教先賢墓碑拓片（一）（二）」（国立北平研究院蔵）『禹貢半月刊』5(11), 卷頭図片3.
- 陳達生著, 陳恩明英文翻譯, 福建省泉州海外交通史博物館編 (1983)『泉州伊斯蘭教石刻』福建人民出版社.
- (1991)「論中国東南沿海古代阿拉伯、波斯文碑銘之研究」『回族研究』1, pp. 59, 60-67.
- (1992)「文芸發現公元十四世紀初穆斯林王国的遺物」『世界宗教研究』1992年第4期, pp. 85-95.
- 陳達生, [法] 克洛蒂娜・蘇尔夢 (Claudine Salmon) (1993)「海南島穆斯林墓地考」『回族研究』1993-2 (総10), pp. 50-57.
- 耿鑒庭 (1978)「揚州出土的阿剌伯文石塔」『文物』1978-3 (総262), pp. 87-88 +1 pl (no. 9).
- 郭成美・郭群美 (1993)「杭州伊斯蘭教曆707年碑、730年碑考」『回族研究』1993-3, pp. 26-30.
- 蘭, 喬治 (George Lane) (2012)「聚景園穆斯林塋地的墓碑」李治安・宋濤主編『馬可波羅遊歷過的城市 Quinsay 元代杭州研究文集』杭州出版社, pp. 238-251.
- 陸芸 (2000)「14世紀中国東南沿海伊斯蘭墓碑石研究札記」『海交史研究』2000-2, pp. 78-83.
- 莫頓, 亜曆山大 (A.H. Morton) (2011)「元杭州鳳凰寺回回墓碑考」『清華元史』1, pp. 193-214.
- 莫爾頓 (A.H. Morton) 著, 周思成訳注, 烏蘇吉 (Vosougi), 王一丹, 張帆, 吳志堅, 黨寶海監訳 (2015)『杭州鳳凰寺蔵アラ伯文、波斯文碑銘釋読譯注』(杭州宗教歴史文化研究叢書) 中華書局.
- 努爾 [陳達生] (1983)「揚州伊斯蘭教碑文新証」『海交史研究』5, pp. 105-109.
- (1985)「論中国東南沿海伊斯蘭碑刻之研究」『世界宗教研究』1985-2, pp. 122-131.
- 泉州海外交通史博物館・泉州市泉州歴史研究会 (1983)『泉州伊斯蘭研究論文選』福建人民出版社.
- 吳文良 (1957)『泉州宗教石刻』(考古学專刊乙種第七号) 科学出版社.

- 吳文良, 吳幼雄增訂 (2005)『泉州宗教石刻』(增訂本) 科学出版社.
- 向正樹 (2016)「元代中国沿海地区伊斯蘭教網絡の研究」『元史及民族与边疆研究』30, pp. 81-94.
- 趙振武拓, 白寿彝漢訳 (1936)「北平牛街清真寺先賢墓碑拓片(一)(二)」『禹貢半月刊』5(11), 卷頭図片2.
- 中田吉信著, 曲鴻亮訳 (1989)「中国伊斯蘭史研究狀況—以宋元時代史跡研究為中心—」『海交史研究』1989-2, pp. 117-130.
- 中元秀・馬建釗・馬逢達 (1989)『広州伊斯蘭古蹟研究』寧夏人民出版社.
- 朱江 (1957)「揚州仙鶴寺阿剌伯人墓碑記」『文物參考資料』1957-9 (総85), pp. 47+8 pls (45-46).
- (1982)「伊斯蘭文化東漸揚州始末」甘肅省民族研究所『伊斯蘭教在中國』寧夏人民出版社, pp. 24-41 (原載『海交史研究』1978-1: 27-29; 1980-2: 43-48).

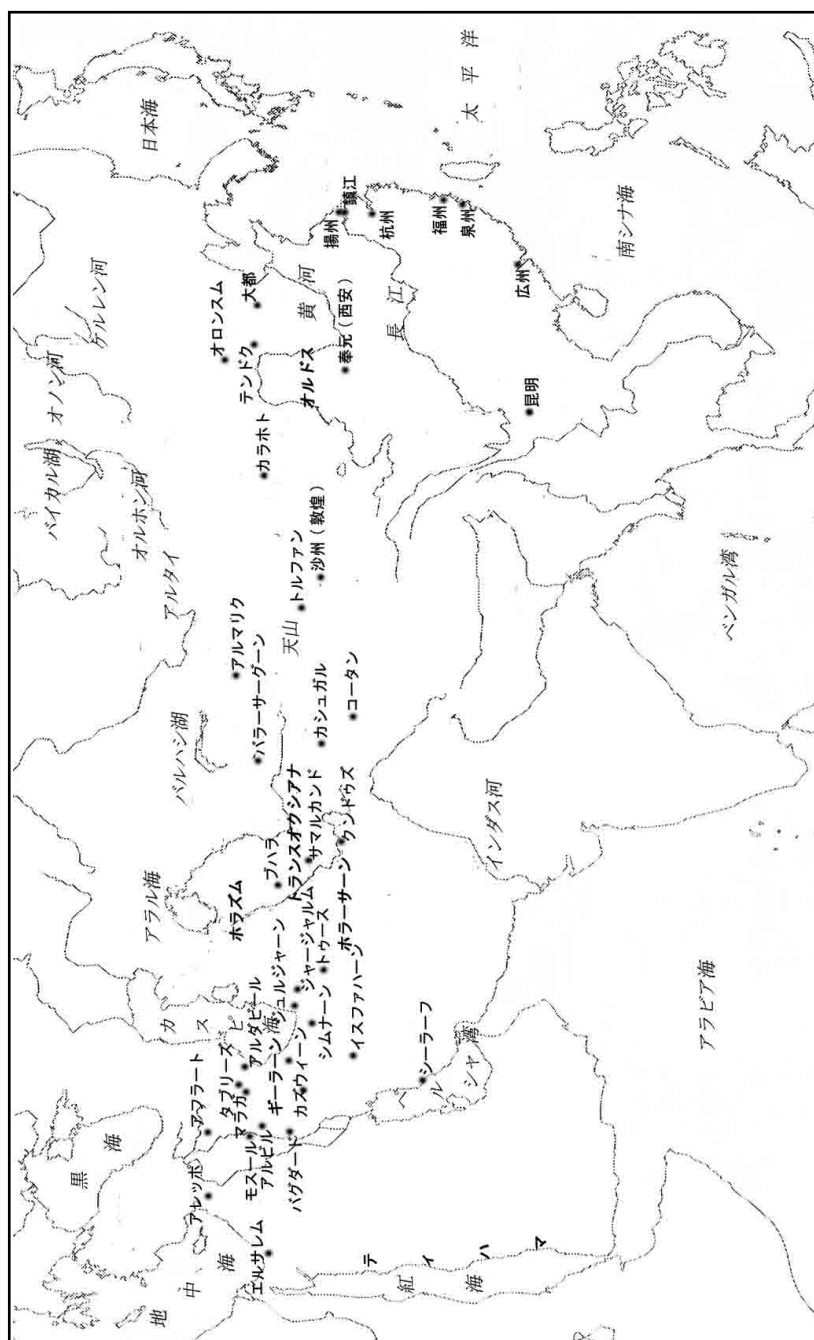
欧文 (ABC順)

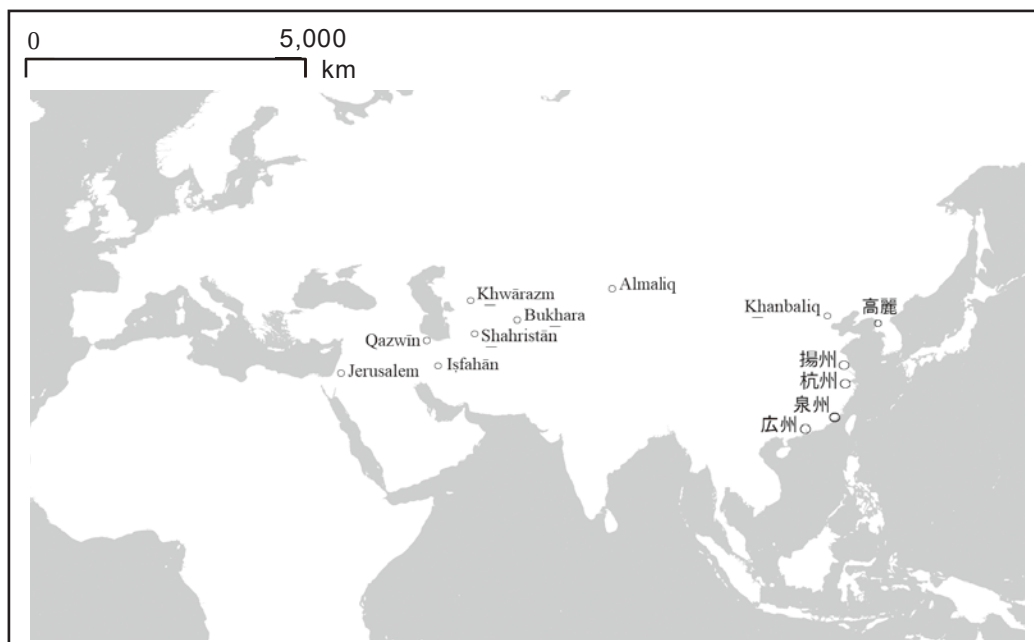
- Arnaiz, Greg. et van Berchem, Max (1911) “Mémoires sur les Antiquités Musulmanes de Ts’iuan-tcheou.” *T’oung Pao* 12, série 2, pp. 677-727.
- Barthold, W. W (1984) *An Historical Geography of Iran*. Translated by Svat Soucek, edited with an introduction by C. E. Bosworth, Princeton: Princeton University Press (Originally published in Russian, *Istoriko-geograficheskii obzor Irana*, Moscow, 1971).
- (2012) *Turkestan: Down to the Mongol Invasion* (The E. J. W. Gibb Memorial Trust). Reprint with updated map (First Published in Russian, 1900, Fourth Edition, 1977, Reprint, 2007).
- Blair, Sheila S. (1992) *The Monumental Inscriptions from Early Islamic Iran and Transoxiana*. Leiden-New York-København-Köln: Brill.
- Boyle, J. A. ed. (1968) *Cambridge History of Iran 5: The Saljuq and Mongol Periods*. London: Cambridge University Press.
- Broomhall, Marshall (1910) *Islam in China: A Neglected Problem*. London: Morgan & Scott.
- Chen Da-sheng 陳達生 (1991) “Synthetical study program on the Islamic inscriptions on the southeast coast land of China 中国東南沿海地区伊斯蘭碑銘研究綱要,” *UNESCO Quanzhou International Seminar on China and the Maritime Routes of the Silk Roads* 联合国教科文組織海上絲綢之路綜合考察泉州國際學術討論會組織委員會(編)中国与海上絲綢之路. Fuzhou 福州: Fujian renmin chubanshe 福建人民出版社, pp. 158-182.
- (1999) “Iranian Impact on the Southeastern Coast of China in the 7th-15th Centuries: A Study on the Archaeological Evidence.” *Maritime History Studies* 海交史研究 1999-2, pp. 98-116.
- Chen Dasheng et Ludvik Kalus (1991) *Corpus d’Inscriptions Arabes et Persanes en Chine 1: Province de Fu-Jian (Quan-zhou, Fu-zhou, Xia-men)*. Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner, S.A.
- Chen Dasheng & Claudine Salmon (1989) “Rapport préliminaire sur la découverte de tombes musulmanes dans l’île de Hainan.” *Archipel* 38, pp.75-106.
- d’Ollone (1911) *Recherches sur les Musulmans Chinois*. Études de Vissière, A., Notes de Blochet, E. Paris: Ernest Leroux, Éditeur.
- Federspiel, Howard M. (2007) *Sultans, Shamans, and Saints: Islam and Muslims in Southeast Asia* Honolulu: University of Hawai’i Press.
- Guillot, Claude & Ludvik Kalus (2003a) “L’énigmatique inscription musulmane du maqâm de Kediri (Xe s. H./XVI s. E.C).” *Archipel* 65, pp. 25-42.
- (2003b, 2006) “Les inscriptions funéraires islamiques de Brunei.” *BEFEO* 90 (1): 229-272; 93 (1): 139-181
- (2004) “Réinterprétation des plus anciennes stèles funéraires islamiques nousantariennes: II. La stèle de Leran (Java) datée e 475/1082 et les stèles associées.” *Archipel* 67, pp. 17-36.

- (2008) *Les monuments funéraires et l'histoire du sultanat de Pasai à Sumatra: XIIIe-XVIe siècles* (Cahier d' Archipel 37). Paris: Association Archipel, École de Hautes Études en Sciences Sociales.
- (2009) "Quand le style funéraire de Brunei se retrouve à Aceh [Épigraphie islamique d'Aceh. 2]." *Archipel* 77, pp. 45-68 ; 78, pp. 7-18.
- Himly, K. (1887) "Die Denkmäler der Kantoner Moschee," *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 41, pp. 141-174.
- Huart, C. (1905) "Inscription Arabes et Persanes des Mosquées Chinoises de Kai-fon-fou et de Si-ngan-fou." *T'oung Pao* 6, série 2, pp. 261-320.
- Juynboll, Th. W. (1911) "De datum Maandag 12 Rabī' I op den grafsteen van Malik Ibrahim." *Tijdschrift voor Indische Taal- Land- en Volkenkunde* 53, pp. 605-608.
- Kalus, Ludvik (2000) "La plus ancienne inscription islamique du Monde malais ?" *Archipel* 59, pp. 23-24.
- (2003) "Réinterprétation des plus anciennes stèles funéraires islamiques nousantariennes : I. Les deux inscriptions du « Champa »." *Archipel* 66, pp. 63-90.
- Lane, George (2003) *Early Mongol Rule in Thirteenth-Century Iran: A Persian Renaissance*. New York: Routledge.
- Moquette, J. P. (1912a) "De grafsteen te Pasé en Grisee vergeleken met dergelijke monumenten uit Hindoestan." *Tijdschrift voor Indische taal-, land- en volkenkunde* 54, pp. 536-548.
- (1912b) "De datum op den grafsteen van Malik Ibrāhīm te Grisee." *Tijdschrift voor Indische Taal- Land- en Volkenkunde* 54, pp. 208-214+2pls.
- (1921) "De oudste Moehammedaansche inscriptie op Java n.m. de grafsteen te Lérán." *Handelingen van het eerste congres voor de taal-, land- en volkenkunde van Java, Solo, 25 en 26 December 1919*. Weltevreden: Albrecht, pp. 391-399+4 pls.
- (1923) "De eerste vorsten van Samoedra-Pasè." *Rapporten van den Oudheidkundigen Dienst in Nederlandsch-Indie* 3, pp. 1-12.
- Mukai Masaki (2016) "'Muslim Diaspora' in Yuan China: A Comparative Analysis of Islamic Tombstones from the Southeast Coast". *The Asian Review of World Histories* 4-2, pp. 231-256
- Ravaisse, P. (1922) "Deux inscriptions coufiques du Champa." *Journal Asiatiques* 11, 20, pp. 247-289.
- (1925) "L' inscription coufique de Lérán à Java." *Tijdschrift voor Indische taal-, land- en volkenkunde* 65, pp. 668-703.
- Ricklefs, M.C. (2006) *Mystic Synthesis in Java : A History of Islamization from the Fourteenth to the early Nineteenth Centuries*. Norwalk: East Bridge.

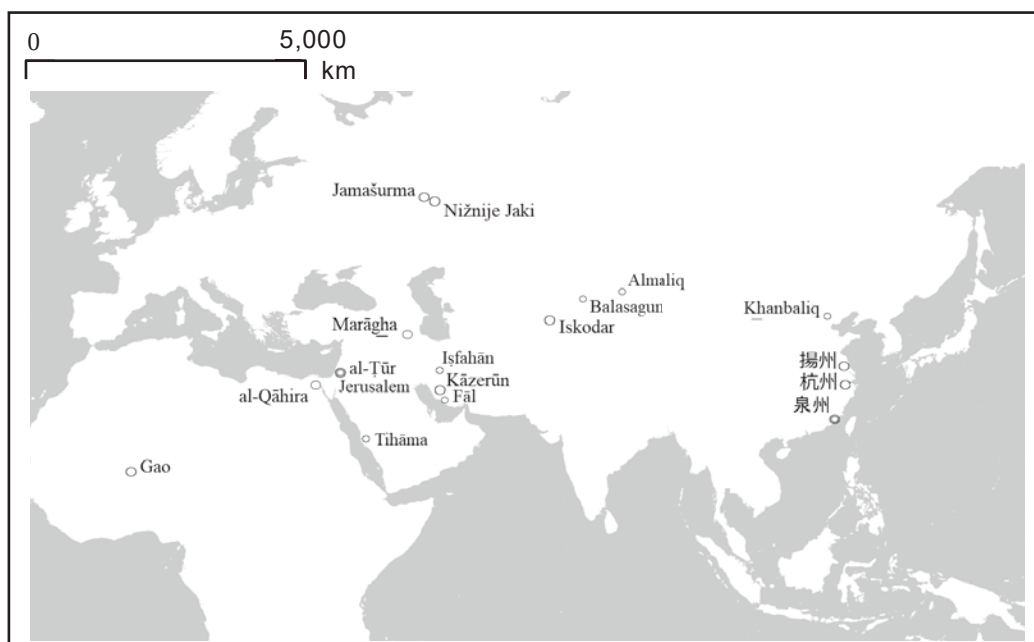
インドネシア語

- Kalus, L. & C. Guillot. (2008) *Inskripsi Islam tertua di Indonesia*. Ed. by Willem van der Molen. Jakarta : KPG (Kepustakaan Populer Gramedia), École Française d' Extrême-Orient, Forum Jakarta-Paris.

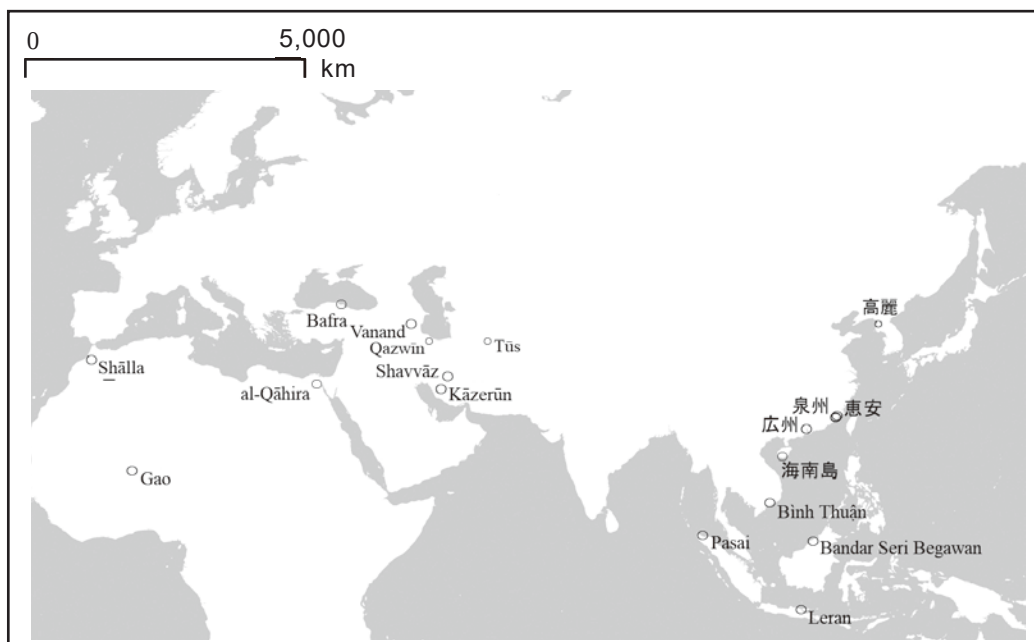




地図2. 定型句 E (「さすらい人の死」) をもつアラビア語墓碑の出土地とそのニスバの地名 (※ニスバの地名は小さい○で示す。)



地図3. 定型句 T (Cor.III: 182/185, XXI: 36/35, XXIX: 57) をもつアラビア語墓碑の出土地と中国出土墓碑のニスバの地名 (ニスバの地名は小さい○で示す。)



地図4. 定型句 F (Cor. LV: 26-27) をもつアラビア語墓碑の出土地と中国出土墓碑の
ニスバの地名 (ニスバの地名は小さい○で示す。)